



## ○「未来」

震災遺構「大川小学校」→

今後発行されるPTA会報でも触れていますが、8月下旬に第72回全国高等学校PTA連合会宮城大会に参加しました。大会の合間をぬって、仙台市から1時間以上離れた大川小学校に行きました。大川小学校は石巻市の震災遺構で、児童74名、教職員10名が学校管理下で津波の犠牲になりました。ここには3か月ほど前に教頭先生も先進校視察の



折に立ち寄られており、その時の思いを綴った紀行文を1学期末の校長室だより第12号の裏面に掲載して配布しています。大会の公式な教育視察で仙台市の震災遺構である荒浜小学校にも行きました。案内人は、東日本大震災当時の荒浜小学校の元校長先生。校舎の2階部分まで津波に襲われましたが、児童、教職員、住民ら320人は3階以上に避難し、学校管理下での犠牲は出なかった小学校です。しかし、学校にいる子どもを引き取りに来られた保護者が、地震が起きる前にすでに下校していた1年生の子どもを救うために自宅に戻り犠牲になられたそうです。地震発生は14時46分。津波は15時55分に校舎に到達しました。

荒浜小学校には大会会場から貸し切りバスで向いました。その時のバスガイドさんのお話が強烈に印象に残っています。正確に覚えていないところもありますが、次のような話でした。

「地震発生後、車に乳飲み子を乗せてすぐに石巻市内にある保育園に子どもを引き取りに行った。津波警報が出ているから避難するよう促す消防車などが走りまわっている中、車を止め、降りて海岸の方を見た。すると黒くて大きなものが家や車を飲み込みながらこちらに向かって来るのが見えた。命の危険を感じエンジンをかけて逃げようと思うが手が震えて何度やってもキーがさせない。やっとの思いでなんとか避難することができたが、電気もガスもない寒い3月。ミルクをつくるためのお湯を沸かすことすら困難な期間がしばらく続いた。ミルクは直前にたまたま買っていたが、食料はすぐになくなり、避難所が開設され配給が始まるまでは本当に大変だった。そんな時、近所の方が自分の食料すらなくて困っているのに、子どもに食べさせてやってくれとインスタラーメンを1袋くれた時は、涙が止まらなかった。県内外のいろんな人に助けてもらいつながった未来だと思って感謝している。」

関東大震災から100年が経ちました。芥川龍之介の『大震雑記』には、当時の様子が描かれています。「大地震のやっとな静まった後、屋外に避難した人は急に人懐かしさを感じ出したらしい。向う三軒両隣を問わず、親しそうに話し合ったり、煙草や梨をすすめ合ったり、互いに子供の守りをしたりする景色は…至る処に見受けられたものである。…大勢の人の中にいつにない親しさの湧いているのはとにかく美しい景色だった。僕は永久にあの記憶だけは大事にして置きたいと思っている。」\*読みやすく書き改めている箇所あり

震災の脅威をあらためて感じるとともに、極限状態であっても助け合う姿に感動した仙台でした。